

若城希伊子

写真 若城誠一



光源氏の舞台

朝日新聞社

若城希伊子

写真 | 若城誠一

光源氏の舞台

日新聞社

工業学院図書館
蔵書章



若城希伊子(わかしろきいこ)

昭和2(1927)年東京生まれ。日本女子大文学部、慶応義塾大学文学部卒業。折口信夫に師事。作家。源氏物語講読の「むらさきの会」主宰。

著書に『小さな島の明治維新』(新田次郎文学賞受賞)『政宗の娘』『源氏物語の女』『空よりの声』『光源氏の世界』など。

光源氏の舞台

一九九二年五月五日第一刷発行

著者 若城希伊子

発行者 木下秀男

印刷所 共同印刷株式会社

発行所

朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五ノ三ノ二

電話〇三―三五四五―〇一三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京〇―一七三〇

定価はカバーに表示してあります

© Kiiko Wakashiro

ISBN4-02-256423-7

Printed in Japan

光源氏の舞台

目次

京都御所

紫宸殿

8

清涼殿

11

藤壺

15

廬山寺

19

枳殻邸

24

桂離宮

28

上御靈神社

32

野の宮

35

大原野神社

38

法界寺

43

石清水八幡宮

46

神泉苑

50

岩戸落葉神社

52

鞍馬

58

紫式部の墓

62

仙洞御所

65

醍醐寺

67

吉田神社

74

逢坂の関

76

北野天満宮

79

石山寺

84

十輪寺

87

清涼寺

91

大覚寺

95

御室仁和寺

100

平安神宮

106

宇治上神社

110

平等院

114

宇治の川べり

122

葵祭

124

比叡山

根本中堂と奥比叡

130

横川と滋賀院門跡

134

六道珍皇寺

139

勧修寺

143

宇治田原・禅定寺の十二面観音像

148

城南宮

152

小野の里と惟喬親王の墓

155

泉涌寺

160

乙訓寺

162

浄瑠璃寺

165

亀山公園

167

伊勢

169

靱の浦のあたり

173

住吉大社

180

長谷寺・三輪山

186

不退寺・法隆寺

192

あとがき

198

「源氏物語」の人びと及び掲載頁一覧

202

カバー写真・表は宇治平等院

裏は京都御所の半菰

扉写真・勸修寺氷室の池

著・レイアウト 熊谷博人

光源氏の舞台

【京都御所】

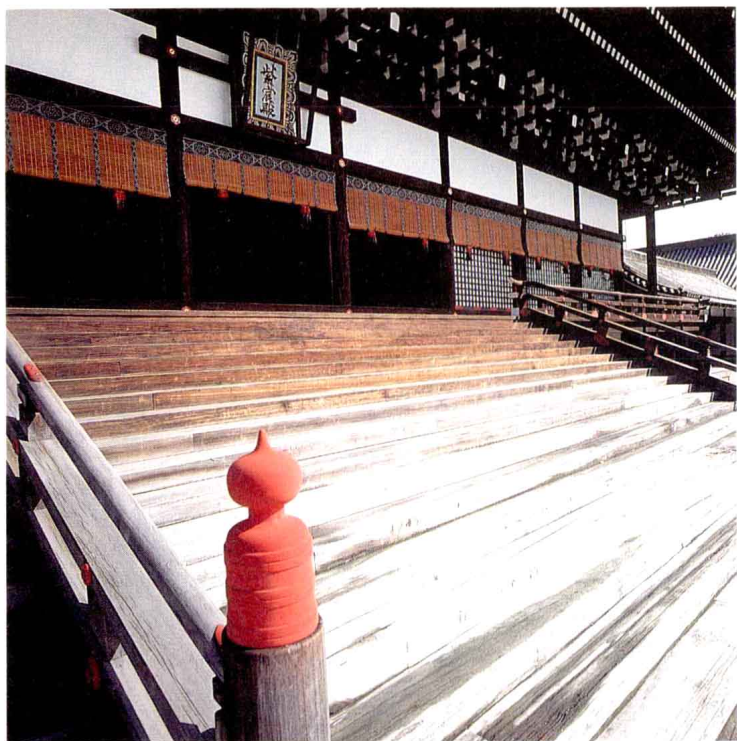
紫宸殿

光源氏の生きた舞台は、京都御所から始まる。

土塀の続く御苑内を歩いて御門の中に入る。紫宸殿を遠くに仰ぐ時、平安の昔を夢の中に見る思いがする。やがて、夢は現実となり、緑の木々の向こうに空を仰ぎ、白砂を敷きつめた広い庭の向こうに『源氏物語』の世界が、私たちのイメージのなかに広がっていく。

『源氏物語』は千年も前に書かれたフィクションの物語だが、文学と歴史の間を考えてみれば、モデルがある歴史物語としか考えようがない。源氏とはひとりの光源氏を指すのではなく、天皇家即ち王氏の流れをくむ人びとのことと思えるからだ。

さて物語では光源氏は、身分の低い桐壺の更衣から生まれた。父桐壺の帝の愛を受け、京都



京都御所・紫宸殿



紫宸殿前庭

御所で元服を迎えるまで育つのである。初めは帝の皇子として、のちには臣下となって、恋も苦悩も栄光も憂愁も、その孤独さえもが、御所を出発点として繰り広げられた。

源氏は幼き日々、父帝について御所の中で暮らし、ついに藤壺の中宮と道ならぬ恋をする。四つ年上の継母藤壺は、幼い時うしなつた母桐壺の更衣そっくりだった。物語の初めを飾るこの恋は秘密の皇子を生むことで、大きなドラマの展開を感じさせる。

今の京都御所は物語が書かれたころの大きな御所ではなく、里内裏（火事などの場合、貴族の邸宅を仮の皇居にあて、内裏を模して造られたもの）である。安政二年（一八五五）の再造以来百三十五年の歴史が刻みこまれている。維新の大乱にも、第二次大戦にも傷つかずに、昔の姿をつたえているのがあるがたい。

殊に紫宸殿前の広い前庭はそこで行われたさまざまな式典を思わせ、幼い日々、光源氏が桐壺の帝とともに人びとから末頼もしき皇子として仰がれた姿が思われる。

幼い源氏の人生は美しい継母藤壺の女御に女人の純粋な美をかいまみて、一生の出発点を闇の恋に身をおくことから始まる。

しかし、世の人びとは彼を「光君」と呼び、なぜか、藤壺をその横に並ばせて「輝く日の宮」と呼んだ。

「うつくしげなるを、世の人光君ひかるきみと聞ゆ。藤壺ならび給ひて、御おぼえもとどりなれば、

かがやく日の宮と聞ゆ」

一対の雛ひなのようなふたりを都びとたちは寛ひろい心で見守っていた。それは人びとが心に祈りをこめてこのふたりから生まれでる次の世をひそかに願い、天のゆるしを示していたとも考えられる。ふたりは心の闇を光にするためにこの世に生きる。やがてそれが世をも照らすのである。

清涼殿

『源氏物語』のおおかたの舞台は御所の中である。光源氏の生活のありさまを想像するには、きちんと整えられた御所を拝観するのが一番ふさわしい。

平成の御即位の式典で、私たちは殿上の衣生活のありさまを目の当たりにしたけれども、残念ながら昔ながらの御殿の中を、人々が動くさまを見ることはできなかった。

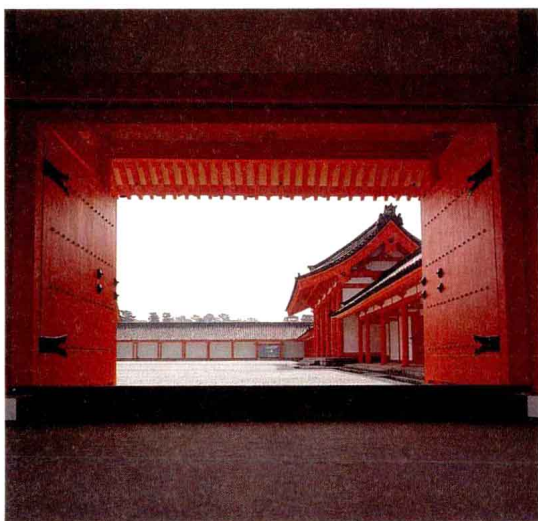
清涼殿は京都御所の紫宸殿の北西にある。天皇の常の御座所である。『源氏物語』の読者はぜひ一度は清涼殿を目の当たりにしてほしい。前庭が白砂で、それほど大きくない建物のすぐ近くに呉竹くれたけ、漢竹かわたけのひとむらの竹が植えられている。

王朝のころには、このかたちの御殿は幾回りも大きかったのだろう。のちに室町以後ほかの場所に常の場所の御殿ができて、日常生活はそちらに移り、四方拝じもくや除目などの行事がおこな



京都御所の一隅。左の戸は半蒔^{はしとみ}

われる場所になった。
 白木の階きざはしの前に立つて、
 昼御座ひのおましをのぞめば、いにしえの帝がその場に座って周りの人びとと
 歓談していられるのが目に浮かぶ。その柱には、四季こもごもの御所生活の感情が刻みこま
 れているのだ。



京都御所。月華門から承明門をみる



おすずみしよ
京都御所内庭にある御涼所



「おはします殿ひぢがしひさしひぢがしの東の廂、東むきに倚いし子立てて、冠くわんぎ者の御座、……。申まをの時にて源氏参り給ふ。みづら結び給へる面つき、顔のにはひ、様かへ給はむ事惜しげなり」

「……御休所に罷まかで給ひて、御衣たてまつりかへて、下りて拝たてまつし奉り給ふ様に、皆人涙おとし給ふ」

「おはします殿」とは清涼殿のこと、「桐壺」の巻に描かれた光源氏元服の一節である。

角髪みずらに結った光源氏が加冠の儀によっておとなになる。桐壺の帝はこの時、いとしい皇子のありさまをあゝの世の源氏の母桐壺の更衣に見せたいと思う。階を下りて父皇を拝したときから源氏となった光君ひかるきみは、この日を境に臣下の列に連なつたのである。皇子のままではかえつてその身に不幸がおこる。臣下となつて帝の後見をすることで世の中の光になる人だ、そう易者が帝に言上したからだ。

もちろん、その後の光源氏はこの内裏の中の局を、控えの間として毎日のように参内してゐたに違ひないが、ここで彼の生活が新しくなつて、左大臣家の婿としての人生が開けてくる。

藤壺を始めとする後宮の女人たちの暮らし、帝のお側にお仕えした女房たちの朝夕のたたずまいが少しずつほの見えるて感じられるのが清涼殿である。